

「学ぶ作業所 フォレスクール」開設のあゆみ

～新しいタイプの「専攻科」を作ったオヤジ～

出口 幸三郎（紀南養護専攻科を考える会 会長）

障がい者は成長がゆっくり。でも養護学校は18歳で卒業。もっと学ばせてやりたい。

落第させてやりたい。そんな思いから、学校をまきこんで、地域福祉を動かし、和歌山のド田舎紀南に「専攻科？」を作ったPTA会長のレポートです。

1) 落第させて～

「うちの子、落第させてくれんかな～。」娘が入学したのはまゆう養護学校高等部の、ある保護者がつぶやきました。同じ考えを持つ保護者がいました。私の次女はダウン症で、ほかの障がい児と同じで成長が遅く、高等部1年時でも幼くあどけない感じでした。あと3年すればこの子も社会に出なければならない、就職するしかないのか、親として疑問を感じていた頃です。その後、都会には専攻科と言うものがあり、高卒後そこで大学生と同じように、楽しくのびのびと学んでいる仲間がたくさんいると言うことを知り、教育法でも認められていることも知りました。そして「専攻科」の素晴らしさ、障がい者の青年期教育の重要性を認識しました。しかし、和歌山のド田舎、紀南の田辺市からは、はるかに遠い都会にしか専攻科はない。「それなら、和歌山のド田舎紀南に、専攻科を作ろう。」なぜか反対もせず同調してくれた養護学校の先生と、超無謀運動がスタートしました。

2) 「紀南養護専攻科を考える会」を結成

はまゆう養護学校の保護者を巻き込もうと、育友会（PTA）事業で、保護者アンケートや専攻科見学ツアーを精力的に企画しました。ツアー参加者も私も、実際に目で見て、肌にかけて、改めて専攻科の良さを実感し、青年期教育の大切さも実感しました。アンケートでは約7割が「高等部卒業後に進学の方が良い。」と答え、超無謀運動にエネルギーを与えてくれました。そして育友会が発起人となって、他の小中学校の特殊学級保護者も巻き込んだ「紀南養護専攻科を考える会」を結成しました。一番の目標は「はまゆう養護高等部の上に専攻科を作る。」を掲げ、県教委の考えを伺いました。やはり、予想した通り、趣旨は理解してくれましたが「緊縮財政のおり不可能。」でした。



3) 教育がだめなら福祉で

それからは、周辺の障がい者福祉施設で、専攻科を説明し、事業展開してくれそうな所を探し回りました。この地方は大企業が少ないのと、先輩保護者に元気な方が多かったので、作業所の質も量も充実しています。しかし、障害者自立支援法が施行される前年で、各作業所はてんやわんやの時でした。そんな中事業移行を予定していた「ふたば福祉会」が、興味を示してくれました。多機能型施設で、自立支援法の自立訓練事業を使う事で、前向きに進みだしました。

4) 「フォレスクール」スタート

市街地から車で10分程度の、山間の静かな森に、多機能型施設「たなかの杜」と名付けられた、木をふんだんに使ったおしゃれなでっかい建物が建てられました。土地は市からの無料貸与、建物は国県市の公的補助金での設立で、その中に自立訓練事業・学ぶ作業所「フォレスクール」が入ります。ただし、最低6名の利用者が運営条件です。ガイドパンフを作り、保護者への説明会や見学会も開催しました。また悲しい事に、例年はまゆうの卒業生は20名程度なのに、この年に限って12名。プレッシャーに潰されそうになりましたが、案ずるより生むがやすしで、8名でのスタートになりました。中心となる指導員は2名で、教員資格を持ったふたば福祉会の若く明るいやる気いっぱい女性と男性、この間専攻科の事もしっかり勉強しているので、安心して任せられると思っています。ただ、新しい試みですので、試行錯誤しながら進める事になろうとおもいます。温かく見守りたいとおもいます。ここまで本当に多くの方々のパワーを頂きました、心より感謝します。